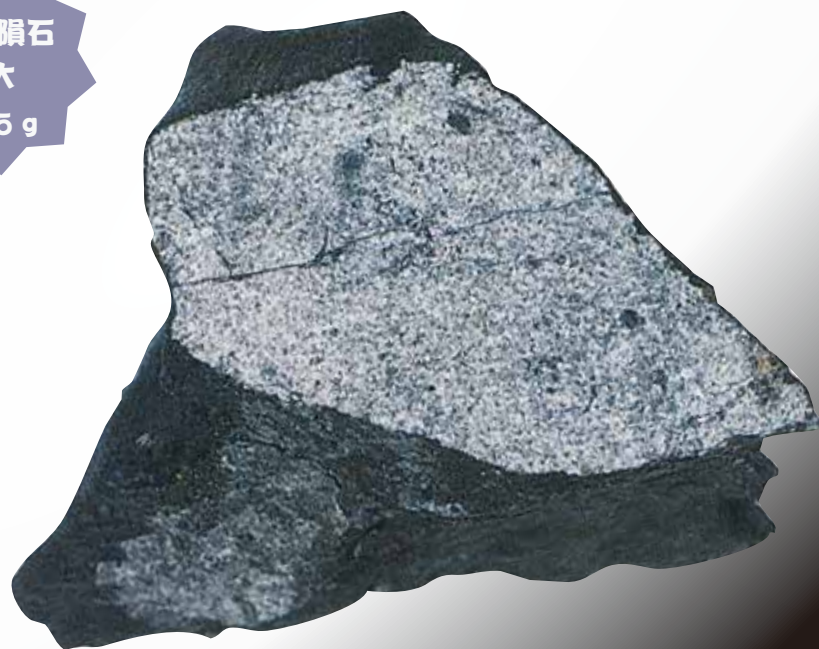


# つくば隕石

つくば隕石  
最大  
177.5 g



1cm

つくば隕石 13号

1996年1月7日の夕方、関東地方などでとても明るく光る火球が見られました。この火球は大気中で燃え尽きることなく、最後は大きな爆発音を発して幾つものかけらとなり、つくば市や牛久市、土浦市などにバラバラと落下しました。これが「つくば隕石」で、多くの人が隕石探しをして、1ヶ月余りで計23地点から総重量約800gが回収されました。つくば隕石には確認された順に番号が付けられ、つくば市に住む女子小学生とそのお父さんが見つけた13号が一番大きく、差し渡し約7cm、重さは177.5gでした。

つくば隕石の表面は黒い熔融殻に薄く覆われ、割れた面にはキラキラ光る金属鉄が認められます。この金属鉄のため、つくば隕石の小さなものは磁石で持ちあげることができます。隕石の内部を見ると、全体が結晶化した完晶質のもののほか、この完晶質の角ばったブロックの間を暗色で細粒の基質が埋める角礫岩の様子を示すものがあります。

つくば隕石は、当時の地質調査所や国立科学博物館、理化学研究所の研究者が詳しく観察、分析して、鉄に富む普通コンドライト角礫岩であることが分かりました。地質標本館では、第1展示室の入り口すぐのところ、つくば隕石の2号、4号、11号、13号、14号、15号、22号を展示しています。

日本でこれまでに確認された隕石はわずか50個ほど。つくば隕石は茨城県内では2番目のものです。宇宙からやってきた小天体をぜひ間近でご覧ください。  
(地質標本館室 石井 武政)